



リスク情報と

Vol. **2**

特集：
愛知県における地域防災活動の活性化モデル事業

地域 防災

目次

愛知県における自主防災活動の活性化モデル事業がスタート.....	◆ 2
自主防災活動を活性化するための3つのアプローチ	◆ 2
NPO 愛知ネットの紹介と事業への意気込み	◆ 3
愛知県内6市町村の取り組みと各地域の「声」	◆ 4
座談会：子どもの目線で地域の防災活動に取り組む -吉田校区「おやじの会」.....	◆ 5
プロジェクト活動報告.....	◆ 8

Research Project on the Disaster Risk Information Platform **BOSAI-DRIP**

地域防災力を高めるためには、個人や地域コミュニティ、NPO、民間事業者、行政などをはじめとする多様な関係者が協働してリスクに備えるという「リスクガバナンス」の考え方が必要です。リスク研究グループは、災害リスクに関する知識(専門知、経験知、地域知)を統合し、高度なリスクガバナンスを実践するための情報技術や社会制度の研究と開発に取り組んでいます。



子どもたちが普段通っている通学路には、どのような危険箇所があるのでしょうか。また災害時に役立つものはどこに、どのように位置しているのでしょうか。消火栓、消火器の位置や、防災器具倉庫の位置と中身の確認、ブロック塀の所在などについて、まちあるきをしながら確認しました。その後、マップ作成システムを利用して、吉田校区オリジナルの防災マップを作りました(取り組みの詳細は5ページを参照)。

「防災マップ」を作りました!

愛知県吉良町吉田校区の「おやじの会」が主催して、「学校で泊まる2009」のイベントを開催しました。その一環として、子どもたちがまちあるきに参加して、地域のさまざまなポイントを点検。これをもとに、防災マップを作成しました。



愛知県における自主防災活動の活性化モデル事業がスタート

NIEDでは、愛知県および特定非営利活動法人NPO愛知ネットと協力し、地域防災力向上を目的とした自主防災活動の活性化モデル事業を実施しています。

愛知県は東海地震、東南海地震によって大きな被害を受けることが予想され、また過去にも濃尾地震、三河地震などの内陸型地震によって大きな被害を受けています。大規模災害の発生時には行政だけの対応では限界があります。

そのためにも住民相互や自主防災組織、事業所の防災組織など、地域の助け合いが大切な要素となるという前提に立ち、県の責務や役割と共に、県民や事業者の責務や役割を盛り込んだ「愛知県地震防災推進条例」を制定しました。さらには地震による津波や、伊勢湾台風などの風水害にも備え、災害に強いまちづくりを推進しています。

こうした県の施策を踏まえ、今回NIEDと協働で、地域のさまざま

な人的なネットワークの構築（または再構築）によって、自主防災活動を活性化させるための取り組みがスタートすることになりました。2009年度は試験運用期間として、積極的にご協力いただける愛知県内6市町村（安城市、春日井市、吉良町、田原市、豊橋市、半田市）の地域で先行実施しています。また来年度は一般公募で参加地域を決め、事業を実施する予定です。

自主防災活動を活性化するための3つのアプローチ

NIEDでは、自主防災活動を活性化するための具体的なアプローチとして、①防災マップづくり、②防災ドラマづくり、③避難所運営訓練の3つのプログラムを用意しています。

①防災マップづくり

平時の地域資源が災害時の防災資源になるという仮定に基づき、資源の所在や危険箇所などを住民自らが確認する「まちあるき」を行い、防災マップを作成します。

②防災ドラマづくり

災害時に起こり得る課題への対応策について住民同士が話し合い、シナリオを作成し、それを脚本化してドラマ仕立てにして発表します。ドラマでは住民自らが演技者となって参加することもできます。

③避難所運営訓練

上記のマップやドラマづくりで導き出された災害時の行動計画について、適切に実行することが可能かどうかの検証を行います。

これらのアプローチはいずれも、地域住民が主体となって実施されるもので、どの主体がどのような行動をとるのか、そのために必要な連携とは何かなど、災害時の行動計画を考えることで、地域の人的なネットワークが形成され、自主防災活動が活性化されることを目指しています。

ここでは自主防災活動を活性化させるための3つのプログラムについて詳しく説明します。

防災マップづくり —自分たちの地域をもっと知ろう—

防災マップづくりは、災害時における危険箇所と防災資源、そして防災行動について理解・確認し、マップを作成するプログラムです。危険箇所や防災資源は各地域や災害の種類によって異なります。このため「自分たちの地域だからこそ知り得る情報」が大いに役立ちます。

防災マップというと、専門家によって作成されたハザードマップや行政が指定した避難所マップなどを思い浮かべますが、これに加えて、地域の住民が自ら「まちあるき」を行い、地域内の危険や資源に関する情報を集めて、「地域独自の防災マップ」をつくることを目指します。

この「まちあるき」で集めた情報を、NIEDが提供する「e コミマップ*」に登録すると、国や自治体、研究機関などから提供されているハザードマップと重ね合わせて表示することができます。そしてこれらをもとに災害時における地域の防災行動を確認し合い、さらにその情報も落とし込んで、防災マップを完成させます。

こうした地域独自の防災マップづくりに参加することは、「自分たちが住む地域をより深く知る」ためのきっかけにもなります。そして自主防災組織だけでなく、町内会、自治会、商店街、学校など多くの団体が参加することで、防災マップの精度はさらに高まるも

のと考えています。

<防災マップ作成までの流れ>

●STEP1 地域の危険を知ろう！

“まちあるき”で、災害時に危険な場所や建物などを確認します（土砂崩れ・がけ崩れ区域、ブロック塀、行き止まり道路など）

●STEP2 地域の防災資源を確認しよう！

“まちあるき”で、災害時に役立つ資源を確認します（避難所、消火栓、貯水槽、防災倉庫、スーパー・コンビニ、公衆電話など）

●STEP3 地域の防災行動を考えよう！

STEP1、2の結果を踏まえ、災害時に取るべき行動を確認（避難経路、要援護者対応など）し、改善すべき点は対策を講じます

*e コミマップとは…

地域社会を支える総合的情報基盤としてNIEDが開発したシステム「e コミュニティ・プラットフォーム2.0」を構成するWeb マッピングシステム。地域のさまざまな情報を盛り込んだオリジナルマップの作成が可能。

<http://www.bosai-drip.jp/ecom-plat/index.htm>

防災ドラマづくり —地域発のドラマをつくらう—

防災ドラマづくりは、災害時に起こり得る状況を想定し、さまざまな課題解決に向けて話し合う場としてワークショップを開催し、その結果をもとに脚本をつくり、「地域発」のドラマとして仕上げていくものです。

NIEDでは、過去の災害における研究成果や地域防災計画、実際に避難所で生じたエピソードなどを踏まえ、震災時避難所で生じる課題を27シーンにまとめました。

課題に直面したとき、人々はどのように考え行動するのでしょうか。ワークショップでは、参加者が災害時にかかわるさまざまな主体（自治会長、行政、学校関係者、ボランティア、NPO、避難住民など）の役割を演じるロールプレイングの手法を導入しています。これによって、地域内で災害時に協力してもらう必要がある主体の発

見や、緊急時の役割分担の検討などを互いに確認し合うことが可能になります。

次に、ワークショップでの話し合いを踏まえ、「災害時に地域に起きると思われることを関係者ができるだけ具体的に想像して」、物語（シナリオ）をつくります。そしてこれをもとに土台となる脚本を作成し、さらに住民や行政、町内会、学校、防災関係者などの意見やアイデアも盛り込んで、脚本を完成させます。これをコミュニティFMなどのラジオやケーブルテレビ、紙芝居や演劇など、地域それぞれの手法で住民参加型のドラマとして作り上げ、公開します。

このプログラムでは主に避難所で起こる状況と課題を題材に実施しますが、地域の要望次第で、避難所以外の内容（例えば、被害状況伝達での課題、要援護者のサポートに関する課題など）や、水害やさまざまな災害でも、プログラムを作成することができます。

避難所運営訓練 —災害時の行動を確認しよう—

避難所運営訓練は、防災マップづくりや防災ドラマづくりで作成したマップやシナリオによって導き出された災害時の行動計画が、実際に実行可能かどうかについて検証するプログラムです。

訓練の内容には、①避難所の開設訓練（災害時に誰が、どのような段取りで開設するか。何を準備するか）、②自宅避難者への支援訓練（炊き出しや支援物資の配送、情報の支援）、③応急救護訓練（けが人の応急処置、高齢者や障がい者への対応）、④安否確認訓練（町内会・自治会の対応、ボランティアとの連携）などがあります。

地域固有の防災マップや防災ドラマづくりの過程で確認された行動計画を前提としているため、これまでの防災訓練とは異なり、地域特性を考慮した地域独自の防災訓練を実施することができます。

NPO 愛知ネットの紹介と事業への意気込み

特定非営利活動法人 NPO 愛知ネット 南里 幸

NPO 愛知ネットは、防災・災害救援をメインミッションとするNPOです。「すべての活動は災害時の情報のために」をスローガンに、防災・災害救援活動による直接的アプローチと、市民活動センター等の運営をはじめとした間接的アプローチから、自助・共助・公助への働きかけを行っております。

私たちが多くの災害現場から学んだ事のひとつとして、「日頃から隣近所で顔の見える関係であるとないとでは、災害時の救援場面・避難場面・復興場面に大きな差がでてくる」という事があり、「顔の見える関係づくり」構築のためにさまざまな角度からアプローチを行っております。しかし、実際に防災活動に取り組む働き盛りの世代や若者は多くない現状で、その関係づくりは課題です。さらに、地域の防災活動が「年に一度の防災訓練」という形で集約され、単発のイベント的な位置づけになり「点」として終わる事は少なくありません。

この「点」を地域が主体となった「面」にして、顔の見える関係づくりが進むよう、NIED といっしょに、愛知県自主防災リーダーを対象にした「シナリオ型避難所運営ワークショップ」等のプログラムを実施してきました。「点」を「面」にするには「いかに自分ごととして捉えるか」がポイントですが、「これは災害時に自分の身に起こること」で、「面になるきっかけになった」との

参加者からの声も聴く事ができました。

愛知県における本事業に参画する地域は、まさに災害を「自分ごと」として捉えている地域ばかりです。「もっと防災力を高めるためにはどうしたら良いか？」また、「これから活動を活性化させるにあたって何からはじめようか？」と、防災力向上のための有効な手段・機会と捉えているのが特徴です。

既に防災マップづくりシステムを利用したプログラムを実施した地域では、地域での地震発生時の予想震度、防災資源や危険箇所が視覚的に具現されるシステムから、プログラムの有用性を体感した地域もあります。例えば、吉良町吉田校区おやじの会さんから、システムを応用して「マップづくりのシステムを防犯マップにも活かさないだろうか？」との案もでています。

本事業は上記防災マップづくりの他、ラジオドラマと防災訓練で構成されますが、ラジオドラマは家族やご近所の方が出演するならば聴いてみようかと、防災活動に普段あまり関わりのない人たちへの波及効果が望めますし、防災訓練もマップづくりとラジオドラマの知識が反映されますので、単発のイベント的な「点」の位置づけではなくなります。

事業を通して、地域が今後どのように展開していくか楽しみであると同時に、顔の見える関係づくり、また地域防災力向上に寄与できるよう、今後とも努めて参ります。

愛知県内 6 市町村の取り組みと各地域の「声」

2009 年度の試験運用期間において、本事業に積極的に参加・協力いただいている地域は愛知県内の 6 市町村です。

地域の防災力向上を目指し、自主防災活動の活性化への取り組みをスタートさせた各地域からメッセージをいただきました。

地震の発生を防ぐことはできませんが、私たちの対応次第で、被害を最小限にすることはできるはず。近い将来、必ず起こるといわれている『東海・東南海地震』に備え、「私たち住民と一緒に考えよう！」「そしてできることから始めよう！」「今すぐにできないことは、どうすればいいかを検討しよう！」をスローガンにし、本事業の協力を得て、地域の防災力を高めていきます。

【春日井市】

- ・中央台自主防災連合会
- ・春日井ネオポリス自治会

高棚町自主防災会では、10 年近く自主防災活動をしています。8 月 30 日の町内会での防災訓練を実施後は、水質検査、要援護者の支援体制やマップなど、この事業との連携を探りながら、さらなる自主防災活動の充実と向上を目指していきます。

【安城市】

- ・高棚町自主防災会

【半田市】

- ・亀崎小学校区自主防災会

【豊橋市】

- ・八町校区自主防災会
- ・弥生町自治会・防災委員会

【吉良町】

- ・吉田校区おやじの会
- ・吉良町防災サポート赤馬

【田原市】

- ・野田小学校区
- ・清田小学校区

吉良町在住のあいち防災リーダーと 2008 年度吉良町防災リーダー育成講座修了者を中心に結成されました。若い有志、日頃は優しいがいざとなると勇ましい婦人消防クラブ、経験豊かな壮年たちの 37 人のメンバーです。

平常時の活動の積み重ねによる防災地域（まち）づくりを目標とし、愛知県・吉良町総合防災訓練の際には「自主防災むら」を立ち上げてその運営にあたりました。

災害リスク情報は重要ですが、われわれが持っている情報の守備範囲は狭く、また情報収集の訓練は困難で共有化も図りづらいのが現状です。しかしこの事業を通して、インターネットを活用することで最新の情報を得ることができ、また具体的な対策の検討を図ることができることを実感しています。

吉田小学校（児童数 345 名）の校区に暮らすおやじの集まりで、「吉田の子は自分の子」を基本理念として活動しています。毎年夏に開催する「学校で泊まるう！」というイベントは、防災意識の向上と避難所でもある小学校の体育館に宿泊体験することで実際に避難する際に子どもたちが少しでも心のゆとりを持つことができ、という思いで実施しています。

今年は「防災マップづくり」に挑戦するため、土曜日の午後から約 1 時間半、まちあるきを行いました。10 名程度の班をつくり、さらに班の中でやくだち係ときけん係とに分け、やくだち係は災害が起きた時に役立ちそうな場所や施設・設備等を、きけん係は避難するにあたり危険と思われる道路や建物等を見つけ出し、ルートマップに記入するとともに携帯電話で写真を撮りメールで NIED のコンピュータに送信しました。おやじたちも子どもたちも防災マップづくりのためのまちあるきは初体験。いつもは何の気なしに通る所を“もし災害が起きたら何が役に立ち、何が危険なのか”を改めて考えることができました。

座談会：子どもの目線で地域の防災活動に取り組む —吉田校区「おやじの会」

山本孝徳さん（おやじの会会長）
兼子義次さん（おやじの会副会長）
伊豫田寿一さん（おやじの会顧問）
鈴木睦さん（吉良町立吉田小学校校長）
山田幹彦さん（吉良町立吉田小学校教頭）

伊豫田：「吉田校区おやじの会」は、愛知県吉良町南部に位置する吉田小学校校区に暮らすおやじの集まりです。私が初代の会長を務めさせていただき、まずは地域の子どものたちのために何かイベントをやるうということになりました。私自身がかねてから「学校に泊まってみたい」と思っていたこともあって、「学校で泊まろう」を企画しました。



伊豫田さん

学校は避難施設でもありますから、学校の体育館で寝泊まりするということは避難所生活を体験することにもなります。東海地震や東南海地震の発生確率が高まり、地震対策が重要視されている現状もあります。子どもたちが実際に避難しなければならない状態になる前に、一度でも避難所に泊まる経験をしておけば、いざというときの心持が違うのではないかと考え、泊まるだけでなく防災のエッセンスも入れ込みながら、楽しめるイベントを目指しました。

吉良町役場や消防署にも快く協力いただき、起震車や消防車、救急車なども用意してもらい、子どもたちを試乗させたり、また災害伝言ダイヤルの講習なども行いました。また吉田小学校にも全面的に協力いただきました。2006年のスタート以来、毎年いろいろの方に協力いただいています。

山本：今年は親と子が一緒になっ

てじっくり取り組めるような企画にしたいと考え、NIEDに協力いただいて、「防災マップづくり」に挑戦しました。



山本さん

今回は低学年が多く難しい面もありましたが、まちあるきを通して、子どもたちと一緒に「ここは危険だ」とか「いざというときに役立ちそうだ」というモノやコトを発見することができて非常に良かったと思います。さらに、まちあるきをしてマップを作成するという作業は、防災だけでなくいろいろな用途に使えるということがわかったのも大きな収穫でした。自分たちが住んでいる町についてより深く理解するためにも、また実施したいですね。

それから先ほど伊豫田さんから協力関係の話がありましたが、PTAとの連携はとても重要です。お互いに「子どもたちのために何ができるか」という目的は共通ですから、協力し合う関係性をつくり、PTAができないことを「おやじの会」がやればいい。その点は非常にうまくいっていると思います。

伊豫田：実は、「おやじの会」を立ち上げるときに、最初に現会長の山本さんに相談に行きました。そのとき副会長への就任もお願いしたところ快く受けてくれたので、心強かったですね。学校側でも吉良町側でもPTA側でもない、ニュートラルな立場だけれども、皆とうまくやっていかなければ意味がない。それを基本に、決してでしゃばらず、決して控え目にならず、という立場でいこうと決めました。

兼子：メンバーはみな昔から知っている仲間、そういう意味でも

まとまりやすいし、話も早いですね。
鈴木：私は今年4月に赴任したのですが、前任の遠山校長のときから、吉田小学校は「おやじの会」の皆さんとはお付き合いしています。小学生を持つ親御さんは年代的にもバリバリ仕事をなさっていて、地域貢献しようにもなかなか難しいという方が多いのですが、「おやじの会」のメンバーはお子さんが小学校を卒業されても、積極的にかかわって、地域のため、子どもたちのために活動されていますので、学校側としても非常にありがたいと思っています。

先日、交通安全マップづくりのためのまちあるきを行いました。こういう取り組みは学校だけでもできませんし、親御さんたちだけでも難しい。「おやじの会」の活動には学校としても期待していますので、うまく連携・協力していきたいですね。



鈴木さん

伊豫田：まちを歩いてマップをつくるという作業を通して、普段は車に乗って通り過ぎるだけで見えていなかった部分がよくわかりました。NIEDの研究員にブロック塀や石垣が危ないという情報をいただいていたので、事前に知っていた注意点をまちあるきで改めて確認できたのは良かったと思います。普段気がつかなかったことに気づいた、というのは大きな成果でしたね。

今回は防災がテーマでしたが、今回は例えば「吉良吉田の生き物」をテーマにまちあるきをやってみると、さらに自分の住む地域のことをもっとよくわかるようになるでしょう。良い取り組みだと思っています。

兼子：まちあるきの結果、危険箇所などもずいぶん確認できましたが、ただ気をつければいい、注意すればいい、ということで終わりにするのではなくて、行政にも報告してできることがあれば対処してもらおうといった働きかけをしていくことも大事ですね。例えばブロック塀を生け垣に替えるなど、子どもたちの通学路を優先的に考えて提案していきたいと思っています。



兼子さん

山本：今回の取り組みについては、果たして子どもたちが楽しんでやってくれるかどうかが一番心配でした。高学年の子どもたちは、例えば製材所の前を通ったら、「おじさん、ここ危ないね」と言います。「なぜ？」と聞いたら、「火事になったらすぐく燃えるよね」といった気づきがある。また「消火栓があった」「消火器があった」と積極的に見つけてくれました。しかし低学年の子どもたちにどのように理解させるかは非常に難しい。ただ、低学年のうちから防災に対する意識を持ってもらうことは大事ですから、遊びながら、楽しみながら防災を意識できるような仕組みやシステムがあるといいですね。

伊豫田：1～3年生はそういうことを意識するための練習時間ととらえて、6年生までにそれが習慣づけられるといいですね。

鈴木：経験をしたかどうかは、大切だと思いますよ。幼い子どもは敏感ですから、怖い思いをしたことなどはずっと覚えています。

1959年の伊勢湾台風のときに吉田小学校の付近も水に浸かりましたが、そのとき船で行き来していたときの写真が100年誌に掲載されています。この台風は私が5歳のときの出来事ですが、いまだに覚えています。体育館で寝泊まりすることもきつといい経験にな

るでしょう。

伊豫田：古い校舎には、伊勢湾台風で水がついた線が残っていましたね。

山本：わが家はおばあさんの筆筒が水に浸かったので、筆筒にその跡が残っていました。

兼子：あれ以来、水が浸かるような災害はあまりないですし、備えておきたいのは地震ですね。

鈴木：台風ではなく、集中豪雨による水害はあるかもしれませんね。

山本：台風も雨も天気予報である程度予想できますから、それなりの備えもできるけれど、地震は突然ですからね。

鈴木：ところで、「学校で泊まろう」の取り組みについても、経験した子どもとしない子どもがいますから、ある程度定期的にやっていたら、多くの生徒が防災について考える機会をつくっていただけるといいですね。地域の防災力というか、人間自身の防災力も大切です。

兼子：今回は「おやじの会」の会員のうち希望者だけの参加ですから、もっと多くの子どもたちに経験してもらえるような機会がつけられればいいですね。

伊豫田：防災というカテゴリ、エッセンスの入った授業はないのでしょうか。

鈴木：総合的な学習の中では取り扱っています。ただ、担任の先生にお任せするところなので、福祉、ボランティアなど先生方がやりたいと思ったテーマで進めています。ですから地震防災でやりたい、という先生がいればすぐにでもやりたいですね。

ただ、防災をおもしろく学ぶためにはこうしたらいいとか、こんな人に話を聞いたらいいといったタネを見つけるのは難しいですね。

伊豫田：必要ではあるけれども、おもしろいのか、あるいは興味を持てるかとなると、防災というテーマ、カテゴリはすぐに食いついてもらえるというものではないですから、確かに難しいですね。

しかし今回の防災マップづくりを通して、おもしろくする方法があるのではないかという感じを持ちました。今回参加してくれた子どもたちの頭の片隅に、少しでも防災に対する意識が残ってくればいいですね。欲を言えば、今回

参加した子どもが参加していない子どもに対して、集団下校のときに「この塀が危ないんだよ」と教えてあげることができれば、今回のマップづくりの取り組みはさらに大きな意味を持つと思います。

鈴木：学校が避難所になっているということは、通学路は避難経路に近い状態になるのではないのでしょうか。町内の人は自分自身の避難経路を把握しているのでしょうか。

兼子：いや、知らない人がほとんどでしょう。仮に知っていたとしてもいざとなったら動けないのではないのでしょうか。

山本：そのときは、小学校に行けばいいぐらいにしか、思っていないでしょうね。

鈴木：防災と通学路というのは密接に関係していますよね。

伊豫田：だからこそ、危険箇所があってはいけない。

鈴木：学校では、子どもたちが学校にいる間に災害が起きた場合についての防災訓練や緊急時の引き渡し訓練は行っています。しかし平日の夜や休日に災害が起きた場合については、町の地域住民の避難訓練ということになりますね。

山田：注意情報が出た場合には、メール配信や電話連絡を行い、必ず親御さんに迎えに来ていただく、という約束をしています。学校は避難所になっていますから、迎えに来るまでは学校が責任を持ってお預かりします。昨年15時の時点で注意報が出たという仮定で引き渡し訓練を行い、子どもさんを迎えに来ていただきましたが、遠い方は18時を過ぎました。



山田さん

それからなるべく学校の情報をいろいろと知っていただけるよう、ブログを立ち上げました。今後も積極的に情報公開して、地元の方々とも協力していきたいと

思っています。

伊豫田：「おやじの会」でも、例えば不審者が出たからパトロールしろといった情報は会長からメンバー約80名にメールで一斉配信されるようになっていきます。

兼子：伊豫田さんと山本さんの活躍で会のしっかりとした道筋ができましたから、それを守りつつ今後も子どもたちのためにいろいろな活動に取り組んでいきます。防災については、いろいろな手段があるというわけではないので、最低限必要な、子どもたちに直接かかわる通学路や避難所などのことなどを中心にしていきたいですね。子どもたちにとってあまり実感はないかもしれませんが、やり続けていくことで意識に根付いていくと信じています。

鈴木：子どもたちを守り、健全に育てていくためには、親も地域も学校も協力することが必要です。防災もその中の大事な要素のひとつと言えます。

山田：今回の「防災マップづくり」の取り組みは、学校の授業でも非

常に役立つと感じています。子どもたちが自分の足で歩いて、現場を見て、地図に落としていくといった作業によって、自分たちの目線で安全や危険を確認し意識することができる。これはとても大事なことで、われわれが「気をつけよう」と100回言うよりも確実です。ぜひ授業でも積極的に取り入れていきたいと考えています。

山本：今後は、防災ドラマづくりにもぜひチャレンジしてみたいですね。

伊豫田：吉良町では、最近「防災

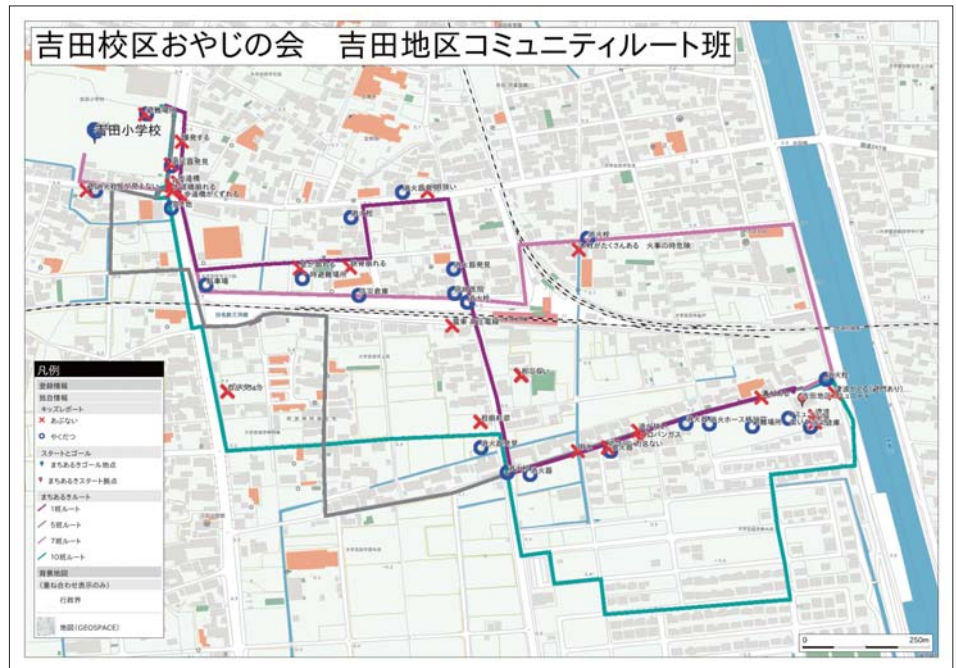
サポート赤馬」という組織が立ち上がりました。あいち防災リーダーのメンバーと、吉良町防災リーダー育成講座を修了したメンバーの計37名で構成され、“平常時の活動の積み重ねによる防災地域（まち）づくり”を目標にしています。今後「学校で泊まろう」の大人版などいろいろ計画しているようですから、こうした組織ともうまく連携、協力していきたいですね。



<作成された防災マップ>



まちあるきの様子



エリアごとに出力した防災マップ(上)と、児童の手描きによるまちあるきメモ(左)

主な地域での取り組み状況

大規模な災害が起きた場合、すぐに救援がくるとは限りません。事前に地域の防災力を高め、災害への対応ができる体制を整えておくことが必要だと考えます。

私たちの研究グループでは、災害に強い地域づくりに取り組んでいます。今回は愛知県での取り組みを紹介しましたが、茨城県つくば市、新潟県長岡市の山古志地区、神奈川県藤沢市をはじめ、全国各地で実施しております。主な地域の取り組み状況は右をご覧ください。

地域の防災力を向上しませんか？

地域の防災力を向上したいとお考えの町内会や自主防災組織、避難所運営組織、PTAなどのグループを募集しております。地域の防災力を高めたい気持ちをお持ちであれば、どのような団体でもご参加いただけます。お気軽にご相談ください。まずは他の地域での取り組みを見学してみてもかまいません。事前にご連絡をいただければ、見学できるように調整いたします（地域によっては見学できない場合があります）。

リスク研究グループのシンポジウムを実施します

12月10日、「東京国際フォーラム」（東京都千代田区丸の内）にて、シンポジウムを実施することが決定しました。私たちの研究プロジェクト概要を紹介するとともに、地域防災のあり方や、それを支える災害リスク情報のあり方について議論し、相互に理解を深

各地域での取り組み状況

新潟県・長岡市山古志地区

7月に安否確認方法や負傷者搬出などの防災シナリオについて話し合いを行い、10月18日、シナリオ通りに実施できるか、訓練をしました。今後、シナリオをラジオドラマ化し、FMながおから放送する予定です。

愛知県・春日井市中央台

9月にシナリオづくりの手法を取り入れた話し合いを実施し、震災時における地域や個人の状況について共有し、解決していくべき課題を明らかにしました。今後、各課題の解決策について話し合いを実施していきます。

愛知県・田原市野田小学校区

11月中旬に野田小学校区13地区でまちあるきを実施し、防災マップを作成します。2010年1～2月に、災害に対してどのような備えが必要かについて検討します。



茨城県・つくば市

筑波山のふもとにある筑波小学校区で震災を想定した防災シナリオづくりを11月14日に、防災マップづくりを21日に実施する予定です。

新潟県・柏崎市北条地区

9月4日に学校と地域が連携した防災訓練を実施しました。

愛知県・吉良町 防災サポート赤馬

吉良町の防災リーダーを中心に結成された防災サポート赤馬では、マップづくりとドラマづくりを実施していく予定です。

福岡県、大分県県境・“豊前の国建設倶楽部”

9月26日に水害を想定したワークショップを実施し、地域の課題を明らかにしました。

神奈川県・藤沢市

市内の自治会や連絡会などを中心に、防災マップ作りやシナリオ作りに取り組んでいます。また、包括的な地域経営の一環としての防災への取り組み方や、浸水・土砂災害の観測・予測、地震リスク評価などの専門的な情報の伝達、共有、活用などの先進的な取り組みも行っていきます。

今後のスケジュール

事業実施内容	開催日	実施地区
マップづくり	11月中	田原市野田小学校区 (開催日は13の各地区によって異なる)
	11/21	筑波小学校区
シナリオ作成ワークショップ	11/14	筑波小学校区
	未定	吉良町防災リーダー研修会・赤馬
防災ドラマの放送	10月～	鶴沼海岸5丁目：FMレディオ湘南より放送中
	11月以降～	山古志地域：FMながおからより放送予定

めることを目的としています。行政職員のみならず、一般住民を含めた防災に関心を持つ方々の積極的なご参加を歓迎いたします。

主催：NIED
日時：12月10日 10:00～16:30
場所：東京国際フォーラム ホールD5
参加費：無料

<リスク研究グループ今後の活動予定>

・日本リスク研究会 第22回年次大会	2009年11月28～29日	早稲田大学 西早稲田キャンパス
・リスク研究グループシンポジウム	2009年12月10日	東京国際フォーラム ホールD5

<研究グループメンバー>

長坂俊成・臼田裕一郎・坪川博彰・岡田真也・田口仁・須永洋平
李泰榮・池田三郎・佐藤隆雄・三浦伸也

発行日：2009年10月31日
編集・発行：独立行政法人防災科学技術研究所
防災システム研究センター
災害リスク情報プラットフォーム研究プロジェクト
リスク研究グループ
〒305-0006 茨城県つくば市天王台3-1
TEL 029-863-7553 FAX 029-863-7541
メールアドレス：drip-office@bosai.go.jp
URL：http://bosai-drip.jp/
編集協力：(株)地域協働推進機構
プロジェクトの最新の活動をメールニュースで毎月配信しています。詳しくは上記URLをご覧ください。